

民基子郡散三集

十

了

内閣文庫	
番號	和 18889
冊數	99 (30)
函號	217 35

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



民基ノ郡散三集之十

日 目 錄

庚寅
京震



淺草文庫



○町奉行松平氏書狀

近傍去ル二日口候候不小鹿場為見至玉井
下りまし如門ゆかみ一向既不一力ナヤ
お内側候候事仕合候よ而代未少く仕合
前度石と毎損一もと子供伯爵を敷
御城入る見方有ヒ六ツ四七敷之宮室
近歩延一二日之晚一向候候。余被
称ゆるもなし

一縷之管は是處注音に障候事無。自分
候も未だ候主勤めも又二日書狀來候

○治たとゑ大比慶が治た日後先一同怪事
ちく大あらへてはるやうアサムト
○治時也怪キ比慶二門後世富ニカミシム
衰モ不道唯一秀、寒倒、底、鷹居林
うき壁ニ高棚有、わき不道接處
接、左、右、中、東、西、一寸位到、それ近と次ち音
ぬ、も、聲、ひだれ今度物右神仕合、
○口交不吉冥界、萬葉集、口詠歌
法事不吉、右天井高壁と倒さき達毛不
○中ノ御、
○白則、薄毛林脱させす程ゆき達毛不
○中斗、
○因役方とも白則、其の裏、一家の、食店天井
高モ亦あ役役取、其の裏モ不滿人取、之、支
拂、が、完、衰落、三日、うちて止、不、時、毫
無事、百、余、度、其一時、夜林泊、者、善
六、周、ひ、玉附、ノ、外、四十九、度、中、五、月、
去、ア、ノ、大、キ、方、を、
あ、ん、
○今日、人、多、氣、立、て、其、氣、氣、宣、付、
外、す、

也更入文，而有此之大風氣也。

○魯山^元
峻嶺崎嶇山徑彌漫可以他處也
行不一里便有石屋此乃角倉常力辟禡營
化庵也名取石室之號而以石爲庵焉
其旁有山燒泥一堵吹火一束甚為痛

二條御城口方へ由古櫛通、聖高不四
日不西一ヶ十人持佐大石留後も一門持
之を爲也と曰原根爲小毛由古居人有之

三十間半 沢城四百倒さし山口縣より通す
四十五尺入六拾石倒 日本酒二十石半の酒とくに
右准一 沢城四百石並びに破損あり誠大造
日後復元の日入角石万石一千石
市中松波家夥も死人骨並人骨なればか
市中六千石怪死人骨三千石也此日有
人一千石血面辰吉の町家也其完と云々^ト
曰く日本酒並木大造と曰破損あり
仙洞の隣に山口縣より通す

禁裏 乃旦屬金盃と口損一と由日修復中
立して之に誠あらしり斗之事 由在在様
やまく有るの日一日修復取も八時と漏毛
主の日修復一四時向左側事外荒く中を坐

七月六日

レモモ

大令官便

高木角林是が清 つゆい市文也度大破林
も常能く此度ニツル御用先づ主代下は
細同人原川吉左衛門主二の石羽泊り山田
牛之助度 ひげ京野多々橋日修復る廻

者達の居右を格別の處も主と接不す言合
や誠にあれども因私とあえあれの事より
之

○唯今自分方の因習書文あれば若狭國名前
不吉十八村連は渡る漏れは由書工テハ
漏れは斗と傳うる所ありの事と考へたる
傳うるの事と而目中一と美名がりてすよ
主化を定め前東主と候ふと主と申せん

○京都町奉行小西切出列家東不販
書物と申度度一件書稿

一其日也免角不收手手。因之行不以。但到四度
未有至以松木也。下後。日出也。之。之。之。
又。少如往以道方。多收手手。宜甚。之。清。種
白。通。也。或。清。宣。也。可。物。也。都。或。黑。通。也。
清。通。也。一。游。通。方。雷。通。清。方。之。由。也。
此。古。南。年。只。之。之。一。向。雷。云。之。之。之。
之。在。之。地。之。一。些。三。中。中。升。之。也。大。也。震。
之。之。震。二。度。之。震。也。震。之。之。也。震。
不。所。底。矣。亦。之。也。一。右。震。也。也。震。也。
左。震。入。倒。之。井。不。所。為。一。主。外。也。也。

自。倒。之。不。所。甲。倒。之。之。代。不。之。之。
怪。掉。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
震。掉。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
初。震。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。
不。所。也。也。也。也。也。也。也。也。
家。私。之。之。一。流。也。寫。住。住。住。住。住。住。
人。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
城。西。之。不。極。也。之。之。之。之。之。之。之。
人。之。怪。家。人。之。之。之。之。之。之。之。之。

殺あ怪死人死亡者跡と拾得三人半許が
あらゆる。死にけんの間も幸運は在り
叶候中止は定まらず成評判一仕事のもの
實の不外哉。一ノ里ある處一ノ里下り坂裏
方のたれも云々有モ江戸城の世多色也そ
活けたりかと疑ひてゐたは先山螺主と
おふか石原一之吉と是の如也

七月四日

要右道林

○大坂日向守行本不居
○大坂日向守行本不居

通日二日申前毛承前大也度之毛過
承前毛承前大也度之毛過
承前毛承前大也度之毛過
承前毛承前大也度之毛過

十六日高原より下り細字の宿にて宿
箱を破捨て毛角を渡す也。暮涼らず不甲
先至り。家來と面合ひ。八日か前から左を
十日もぬ坂入れ。またよよぎても益々難い。夜、寝
山由来の家事は治らぬ。最も山城をも。海
之舟由東の大波を避けて西へ伏し日遅回れ。あら
漁町家事も倒山松も。亦波往來被止る
事凍大波底木立多石者完探住居向
港山中木田樹筋筋根まじゆ裂剥山見

かくの事に一日回刻比度附宿泊の在
主役おれどかへ家康からおもて浪花を怪る
うだりとおもておもておもておもておもておもて
私使遣へ西府をおめおめおめおめおめおめ
御一ノ二三ノ時候りん席上二度おもておもて

七月廿一日

向宮庄人而林

廿度、東都大寒、次年立春、中止、過日二

○二条殿家本分書大之写

利亮

中之年也度常切一ツも脚をひくが門縁大
比度引の日向とて日奈山原町已過るか合
入合はまに方々煙立家多清高は寫移着
之に火煙山と便「城也氣の三斗うへ
る要つりも其はうとくは發入ト方見而不安
当夜除ゆ、門内「三条殿」乞附右医
町家も者も皆一町之中、主と云ひ戸と云
き人を家口、否不申乃申も古外怪事ノ粉
有と云ふ而御事倒の移事六井口當一
葉代為古事二条殿上廻りれを日奈山比倒古事

人一ノ流の應住庵を取
る事多也此處も一二日入る事有
て其の後は時々一晩か二日一夜の宿
住居日数即ち人少しおよびお出でな
く、口ひ度入る所止一日處也——此一ノ日
無事の處也——二日二夜亦是居候も

上天子ハシ小御不_レ清庵古御
仙洞御_{ハシ}廣隱御_{ハシ}清庵古御
古宮御_{ハシ}廣隱御_{ハシ}出御_{ハシ}古入御_{ハシ}方氏
上り也_{ハシ}此_{ハシ}之_{ハシ}二日_{ハシ}ニ西也_{ハシ}到_{ハシ}中_{ハシ}附_{ハシ}秋_{ハシ}

有ノ由吹東北ノ風ノ九時半より大
地震或ハ又大火起シ火事ノ後及々此
付東西南北各方向而方ノ事有ト有ニ通
ニ敷ニ住居所移動者滿上ト下ト揺動
被災人連住所已改家中、高臺避難シ
人も少く困窮ニ連住所ト共ニ付モ皆也
大震アキテ先レ以降搭アリ度モ七時
既往自是震有ルヒト八時半ヨリ通一晩
諸震連続アリテノ活火成矣シハ四時餘
之ニテ是ニ雷電大夕立ノ怪有ルハ大風吹來

治世佳斗
之日ノ通内ナシ又蒸氣
ニ晚、私モ体乏シテ在ホイ麻子ノ唯今其
限止時半九時半ノ事ニテ、矢張因ルノ震也
有ノ油井ノ事也半時刻、擇吉也
之日當モ右近口火打擇左方訓、お卯が
之日ノ警戒始ム二日ノ伏震教化百十
不和ト二日ノ三日約近凡百六十分度支ト後ノ附
ノ在私家門ノ皆一處ニ移セ而此后少有事
中、此を一統云怪事教有ルハ否元大船損

ノ一も志未所仕合。是たは石井先機が之候
云々在仕合より、之を先に薦めし如中止り
日本向洋上系も在り候ひ。中止り事無
事も二種の微差仕合外假方仕合机
事の難處、之ト急

七月八日壬午

西行

○大健康之廢。并先日而書。 石原清左衛
萬月二十日中刻大健康。移配東海道大津宿
并内町。清左衛門六朝町。家並木。及換引
石代度後翌二日午刻以迄教説比附家右摺初

市中之不景氣。凌方同主仕合至其格。並
農勃。云。在來治仕合。而其主を勿論人。る怪あ
ホ。云。石井右。并替役。不并。自代長庭。而。御病。不
換。也。來仕合。御算。別業。主。り。在。り。代。役。不
和。局。の。多。の。御。村。之。廢。也。之。夫。要。て。之。主。如
主。も。か。も。不。か。も。追。て。便。も。后。未。追。る。且。而
一。手。上。り。の。次。と。け。後。日。而。主。上。り。と。

庚七日

四都三所

○當月二日不就大健康。承。上。書。小。幅。之。稅

通月二日夕七時まで大比喰。高麗ニロ九時
右都。之後ナムノ比喰地言ホシ。ロ言
ひさ大都右治。中モ京船一隻入候。市中。も
怪め人ホシ。ソシ色風。モ店モを左村。
其曰後。之經。舟支配。而。ま。よ。走。見。方。代
モ。多。之。方。右。調。高。モ。一。ノ。モ。稀。城。大。也
寢。サ。不。多。前。レ。候。ト。ソ。以。上。

通月二日

日記定所

小倉主税

○大毒。御。來。書。

一一世二日七時。色通五。多。也。方。が。門。動。仕。地。度。達
南。御。城。中。小。排。卫。始。小。口。不。可。方。口。太。鞍。槽
近。之。る。三。日。往。間。被。却。悉。卫。悔。と。ゆ。う。所。一。通。の
石。垣。も。被。か。一。日。も。ひ。づ。ミ。は。方。主。人。立。付。來。
外。通。行。も。不。若。被。主。外。御。城。中。口。渠。口。未。藏。示
被。懷。あ。是。事。口。小。屋。も。有。四。口。毒。方。口。小。屋。も。方。見
小。屋。も。近。被。損。多。食。道。口。因。及。換。口。小。屋。林。ゆ。達
ト。太。口。通。も。方。口。若。通。拾。形。位。ナ。して。口。住。屋。
新。ホ。ホ。由。ホ。シ。方。モ。換。シ。入。ラ。ホ。ホ。ト。テ。口。住。屋。
新。ホ。ホ。由。ホ。シ。方。モ。換。シ。入。ラ。ホ。ホ。ト。テ。口。住。屋。

向半拂りて大破を受けて由一死に拂ひて
今日在る右二日夜あはれ死而見付け沙誠丸と
沙と曰を被す處おもは山小屋中へうつての間役
機方殿被候よりある法事お彼へも白毛灯
持手火とえども附程へ墨流る日と未だ有
て右地蔵と而御城中へ西へ移るに一連
曰東口毒瓦之内トハ六人怪我をも先令モ別系
者とも外を怪我人と思ひ不仕合地蔵後門
傍め心の方へお四助を度てかづつゆきと
大震ひてあらへゆきと仰ふ不仕合二日夜を回復

横田初一泥水へ遊び口小庭介度ニ歩き集う所
二日夜水は深田在の間を渡るを以て次第付口小庭田
兵主はそのまゝしてまつたが、其の後も矢張り兵主の
勤めても止まらず、日一除法（ノミハラフ）と云ふ事常有
陽師（ヨウシ）奉仕する
禁裏（モニシキ）も事御殿御（モニシキ）も
四處（シテ）で飛行（ヒツヨウ）する。其の後少（シカ）法（ハルメ）も爲り
安（イシタ）心（ハシメ）無（シタ）怪（ハシメ）神（ハシメ）不（シタ）仕（ハシメ）人（ハシメ）仕（ハシメ）工（ハシメ）格（ハシメ）
之（シテ）は根（ハシメ）付（ハシメ）安（シタ）無（シタ）右（ハシメ）夷（ハシメ）夷（ハシメ）也（ハシメ）廢（ハシメ）矣（ハシメ）
今（シテ）は一月（ハシメ）三日（ハシメ）の間（ハシメ）も爲（ハシメ）泥（ハシメ）水（ハシメ）方（ハシメ）不（シタ）度（ハシメ）

やしりもそより出一ノ火を不東人所至る
麻又粗鰐と云ひす。二日三日下の下に
主使通嘉口平あしる日がて一月工はと腰復

七月四日

松川中流小人衆にてお拂りゆく後
より方をまづ、左に移り多くはまづ方より左也
左に伏人達大坂道とお渡りて左に詰仕入
渡河橋をまづ、左にまづ物が詰め
アリ。右に左の原木にまづて上りて
○石墨と天理左方同行多城書院

此二日夕七時より西大坂度るあニ有若教養
小屋と自上不也不亦左向、退去する右あニ度
因省教度る西小屋下陳向六軒達に右向
天井渠井附馬井木為壁もあら高仕右向
小屋よりは行ひて左小屋下陳達に右向
馬井渠井に右向高仕は右向小屋皆仕ひも
外九事とお小屋仕は 沿着口御殿向引余
之、右向左向右向りの天井高仕と候左根毛もす
爲不、此左手、あめりかづり、倒山陽ふらて
支外口全高是也附天井口御殿向左向右向

外而大不移爲より右比度えある二段の止居
りの火夜中より更所唯今より遙く近づけ
治た時、度劫花寫も部下化して度よりを
二日一夜も右擧もていのま夜も右と無く其や
小底入り。お御見工十一流小底の度も安
西より之候。御城中為毒塔より怪事
云々在由東北因及正毒死塔より御見
大吉仕毛ト。御見毛人怪め人毛也
治も令抱り往もす。お此者美濃ノ左小底
破損する有小底上方注之不移行。御見は小底
破損する有小底上方注之不移行。御見は小底

不移行。御見。草妻二基並木石柱碑も安
玄室向度。毒死塔東方破損。治地役向住居
大津。向水立。由右廿二日書也。御見毛
御城入毛。毒死塔。御殿向日全貌。治地
里也。向水立。小底口。毛拔乃。御見毛。治
御殿向見。御見毛。治地役向。御見毛。治
安。小底。破損。御見毛。御見毛。治
毛。毛。治。御見毛。治。御見毛。治。御見毛。治
毛。毛。治。御見毛。治。御見毛。治。御見毛。治

因役方も日西令ノ御印序當令一ノ不以行
之ノよし也

七月乙酉

○伊勢神職の者津輕姫振高(タツタカ)・(タツタカ)也
地震及數刻震最不安因茲一七箇日一社一同抽精誠奉祈天下泰平寶祚長久萬民安穩旨
被仰下候早可被下知于神宮候也

右七月二日出四日達

地震經數日月宸襟愈不易去二日已來雖既憑神

明之冥感靈驗未全因茲更一七箇日之間天下
泰平御祈一社一同愈可凝丹誠之旨可被下知
于神宮之旨被仰下候仍如此候也

右十一日去十三日達

○謹考當月二日申下剝地大震其後餘動屢發益
得卦神假陰鬼為祟祈祀獲福尤平和也其後益
得卦兩災陰陽薄陽失其所風雨之徵欵天往或
問曰地本氣之渣滓聚成形質者來于元氣旋轉
之中故兀然浮空而不墜爲極重宜忠以鎮定也
而四圍有窺相通或如蜂巢或如菌辨冰火之氣

伏于其中蓋氣噴盈欲舒不得舒如入筋轉脉搖亦與雷霆同理云々又曰震後地下煙氣猛迫熱走火而出則震停矣李子曰周語伯陽又曰陽伏不能出陰遁而不能蒸於是有地震一書云天地之氣不過其序若過其序民亂之也陽伏不能出陰迫而不能昇於是又有地震是陽失其所填陰云々因之則今年氣候不順故陽氣伏鬱不能舒而成震者也元來治世聖德遍四方何有變異于天文考要曰寛文壬寅五月幾内地大震北江最甚餘動屢發至于歲終云々此頃夜間飛火多又餘

動漸減可無異停興

文政十三年七月十五日

陰陽助保救

○活氣もんじ風体人ふもすりのと
計の外あそはへへへへへへへ
持 旦暮ひよきそくわいのと
生能つむへたれども月二三日
のれ大比度そもソヒツテサドミキモ
のれ小口車をひ始大キソアレ
け活風ひりあそり一月前のソ摩ノム

。左ノ一ノ十二三度もあらずまづさ
の草木は、御所の花木をもむる
を除くと、その多くは、人間の手をも
たぬものであつて、其の草木の生長す
る所は、必ず、人間の手をもたぬ所に
在する。左ノ二ノ三度もあらずまづさ

八子圖

卷之三

卷之二

○二条昌景の後摺書
吉二日午後申す。近地度を初めかへり。

正列の如く上りて口小庭に立てて左廻廊にて
久かのままで着物脱ぎ天井壁を爲め左小走
口小庭口あつて又一度キ場所をもれぬ口東虎籠
毛糸のじと爲西小庭門が口小庭仕古井
小走背付ゆづてあり方合意を之の
御手すりよ狭いも高築口よりて御先
入りあ洞の口口倒きゆう縫キ口之廻口天井
蓋而く狭く通不所計ニナリ破りゆ
平井口口色口土井工も同様口太鼓橋接合
ノ有るこれ爲くのち縫も傷もそぞ中仕切門

直縫不計方口と接爲二天口人役口不もろく爲
口口燒失口口蓋石垣口前口口も御しれれ
口口橋孔口仕事未竟口左一人立口そそく蓋
かく運口そくの西口縫口口蓋口口
云候傷口口燒外口口すひ口廊下構合口口
云候拾口口口口口口口口口口口口
口口口口口口口口口口口口口口口
大脚傷口口被換迄小庭一ヶ未達口東口蓋石垣
而く口口口口口口口口口口口口口口口
具外第ホアカレ故度已未申口縫も外自是御

お次高止端猪鹿屋板毛木不承應いより不承應
桃毫も大辭たとし稻荷の奥入口^勝株毛^高不承應
此二人夜押うる御助ちゆ由一令下^ト抱^ト方
あ、とヤリ、七時半^ト寝起^ト先^ト医^トの時
此宮城も亦とて壁尾も高^ト近^ト之^ト
と伊勢毛毛^ト小室も余めら^ト不^トの栗
主^ト毛色^ト矢^ト十方^トアリ^ト才^ト只^ト口押^ト
チ^トの助^トか^ト止^ト也^ト亦^ト不^ト付^トのあ^トス^ト有
之^トも一令抱不^ト戸板^トて昇^ト屋^ト升^ト火^ト
もあ^トト^トけ^ト往^ト後^ト寝^ト之^トも^ト

人中不承應^トのう^トあ^ト口小室^トの空^ト地^トも^ト
東^トも^トはて^トうんり桃^トう^トせ^トこ^トも^ト
六^ト世^トの御^ト御^ト代^ト里^トと^トも^ト御^ト御^ト代^トよりも^ト
主役^トの御^ト御^ト代^ト人^トと^トあ^ト、^トを^トも^トあ^ト口書^ト
と^トあ^トも^ト御^ト口全^ト毛^トも^ト口毛^ト櫛^ト不^ト承^ト禁^ト
貞^トも^トも^トサ^ト口^ト城^ト入^トも^ト六^ト日^トき^ト敵^ト手^トの^トも^ト
詔^ト月^ト代^トの^ト城^ト入^トも^ト六^ト日^トき^ト敵^ト手^トの^トも^ト
連^ト日^ト城^ト入^トも^ト六^ト日^トき^ト敵^ト手^トの^トも^ト也^ト
被^ト下^トあ^トも^トも^ト皆^ト外^トも^トあ^トい^トあ^トの^ト二^ト月^ト

と、西中止。今時、震動の、左小屋。
車体を、車、古の、口歛向、口天井、安口、小、と、面
口角、裂け様、口相、形、口す、萬能、口也、
口全、充、口車、底、毛、口底、も、口入、口列、口者
甚、者、若、中、も、蒸、者、憲、者、
アラシ、先、ち、大、暑、る、血、口満、少、底、水、年、
毛、口往、大、暑、る、口、わ、恐、心、出、も、口震、振、
は、大、役、の、た、右、か、う、若、御、城、市、中、い、る、
ち、驚、出、多く、換、一、怪、取、く、利、あ、有、——、
と、幅、川、走、ま、外、津、御、不、口細、口毒、不、古、あ、付

おもかニロ後から言ひねりけと稱
波多の事。此の陰陽師は後代未
し止後代に衰弱したのである。もとゆる
鳴ら不下行ともいふ。ひまほ書いた言葉
も漢字の不器用書元より脚を怪我もして晚
夜已あく日本語拾六七八の本の集古の席も詰め
文首解の書せや二日の夜も家中のもの
不油外と云ふ。由希代称なり。とては
○承前大比嘉町を行ひ、梅生をひ市中へと

漢家一百四十六

百尺檜之羽

西行

拾人朝

辰巳

拾人

右松平伊勢ちよか一卷

○承前玉毒先人同萬年七席よめ朱書御写
前後下すま是既往御候候候候候候候候
日が度日候まは候候候候候候候候候候
難處也如夕時ナリ辰巳之方の也辰巳之
多事粉々く御もるに 御嘗日をもる
あくべト松風ノ下さ御別業もすむる

日あんてち不いお毒もと同辰巳之怪氣り在
きくも下す食田龜吉親方十陳からしゆ
お茶樂の足とあられも上一極高價也此と
病も一病も一病も一病も一病も一病も一病
恙も一恙も一恙も一恙も一恙も一恙も一
無くすれどもまへ外見りあり物事
又乞うけり全ほすらうすらうすら

不凍みざんよ御もす

長雨龜吉 松浦八次郎 伊東源之
高橋小吉 山崎権助 久保之六郎

永井廉八郎

志木又四郎

野々村元介

石九人也

自ら仕合つてゐるお毒

安藤長次郎

小陳石方

福川新之郎

因引

佐原吉十郎

因引

松山八郎

因引

石四人也

右ノ尔ノ保桂山あは桂山も仕合ふ一
井吉彦一ひ外お毒石方大破どすと先手

きりよしひむかひ

南条吉重善

杉本源左衛門

福井半郎

三木信之郎

白井伊威

布井清三郎

西川繁三郎

毛利金兵衛

毛利少輔

山口四郎左衛門

牛込三十郎

石拾三人也

調、松原仕合も七時半余りモア敵凌左支度
仕合小坂丸山也、右ノ後半二三時半とて、
之を率來来立、浪江よりと引取一石主ひて
うち其の隙間もあらむ也、底の弓馬を取組

一月丙寅夜一更半之候た一命先ひて御
怪事あつた。うなだれとも見る。心もまろも
松牛ゆきの痛い不平。諭語御内と冥助と教
育院令を假てつゝ。おもむかず御内
心よりうなだれ。

御城は西東小山の不ふ及人破る麗麗門
たとれり。己亥日候をす。御内とよく御
御歎息つて。口是病不はひのう。よし。今
彦尼寝告をうる。由天を度中侍ひ。合
馬石橋上中をうる。の不ぬけむ。病文と

大比へうけ高。稻葉。田勝。川原。山口。山
手。山内。船の石を下りぬと急入。大きうら
とくらまよる。わきす。日暮宿。宿石たゞ。皆
落き高。未候。戸前。うき。ゆめ。力。落
おみらした。それ。向人少度。日候。向人
二人怪事あつまく。おねいり。宿。よど。店。僕。一命
よど。アリ。宿。おねいり。宿。右。左。一匹。二匹。夜。お
まつ。お口。お見。地。殊。とく。一匹。二匹。夜。お
度。動。附。夜。お。まつ。お。見。地。殊。とく。一匹。二匹。夜。お

右去私ノシニ小庵門内より右舟一舟二口又
六舟是を敷キテ廻ノヨリは廻モキテ廻、
法可付小舟也。俄に至るは也。御敵
事城ヲ日暮ノ方へもと小庵。御覽セ付
にて。是れ我御も三、四度の時船を毒氣小庵見合
シ在り。船ノ底底を対度。其處を毒氣也。首を立ヒ也。船等
ハ必ず被ツ。それより御船。御船ノ底。御船中。大破
シテ。御船ノ底。御船中。大破
シテ。御船ノ底。御船中。大破
シテ。御船ノ底。御船中。大破

あくまでも左様で
七日後
安堵

七言律

長清今在焉

○人毒方源也卷之三

詩新七言

也哉二〇七〇年也食宿の朝七時あくまで
はるかに夜暮りが一すま亦(トナカイ)や
あ(初音)助漣(アシタツ)翁(ウノ)清(キヨシ)翁(ウノ)連
ち(ヤマハ)方(カタ)仰(アガ)ひたゆ(ヒタヒタ)
もの(ニシテ)を(ミル)て(ヨリ)居(リ)ゆ(フ)る(シ)
も(シテ)。す(スル)て(シテ)御(ミサ)キ(モ)同(シ)て(シ)

○二條酒乃子有舊。一御在九御殿。不先年。生燒失酒。之。

一二四九濟陽多爲雨雪之氣外亦有列東山澤甘肅

一
清車底清全貌曰本末亦望焉。又分清以之云。唐
曰。唐陽每地刻人字不主产。位近山石垣前。而一曰。唐
有。

一清風之引來以寧比懷不惟
一也。清風亦清。一也。也不單之曰清。

一秉之方既玄冥清矣而聖朝不以五方同化舉

日小庵書の東壁爲半怪取人やと見ゆる
新居方松即ちあらわしの居
一東壁書元日小庵書の壁に居る者も半怪取人やと見ゆる
一色墨淡い口文居日小庵書の東壁爲半怪取人やと見ゆる

一 五日小倉御付は怪取人(さとひの回り日小倉)にて
は十八人今少くよりありまゆ(十六人)より十八人
あへん所多毛(おほひのそ)候ひよもすらうわすれ一歳の怪取
事(こと)一命(めい)お降り候(おき)云(い)は口是(こと)ニキス
候(き)事(こと)ア摩所古付(アマソコト)

一 田安倉(たやすくら)付りも云(い)はたに傾危(けいがい)あ

一 あ口番元日(あくばんげんじつ)小倉の怪取(おき)七八朝(しあさ)よし田
主外(しゆがい)を(を)お付(おつけ)古(こ)かぬきアシタの多氣(たけ)
多氣(たけ)を怪取(おき)人(ひと)も余徳(よとく)たてて一命(めい)お降り
候(き)事(こと)アマソコト

一 御所中右(ごしょちゆう)を無詮見(むせみ)代(だい)重敷(じゆふ)ま外(ほか)地(ぢ)也(や)元爲(もと)
毛(け)毛(け)也(や)原(はら)也(や)也(や)格(あ)怪取(おき)人(ひと)も承(うけ)かず
一 京中怪取(きゆうちやう)人(ひと)而死(めし)三百人(さんひゃくじん)也(や)のつ在(ざい)
一 御所毛(ごしょけ)也(や)是(こと)日單化(ひだんか)木倒(もだい)上(じょう)也(や)格(あ)
毛(け)毛(け)也(や)也(や)

一 京町中達家(きやまちちゆう)の左由(さゆ)付(つき)京町御都御高(きやまちごとくごたか)
高(たか)住居(じゆき)を深(ふか)く(く)さかのち高(たか)ある怪取(おき)農商(のうしょう)
ノ申前(まへ)所(ところ)も右(う)怪取(おき)人(ひと)も口由(くゆ)も掌培(てあつ)
倒(たお)也(や)承(うけ)不(ふ)
大方也(おほ)也(や)也(や)判形(はんけい)一 事(こと)は大(おほ)も

諱利うねる。ひことてに、まううめのうりうり利形仲。
方のうはアラモロモセア。やくちか二十か一。年。七
云う。せん。ナ。虚。す。と。だ。都。を。喜。國。滿。和。
方。大。送。し。宮。御。リ。モ。シ。モ。ニ。必。ハ。配。ハ。不。方。多。
モ。富。初。中。ノ。ル。ト。シ。辰。初。ト。富。門。憂。大。辰。少。
そ。は。一。寸。ニ。御。ヌ。ト。モ。シ。一。年。ち。ニ。也。辰。達。
ト。恒。養。ト。ヒ。モ。安。堅。三。日。ロ。同。根。ラ。ム。ト。ト。
時。ト。テ。御。吉。十。日。ノ。有。恒。十。日。ノ。ト。ト。ト。
辰。物。ト。富。ト。ラ。辰。ト。ト。モ。も。辰。ト。ト。ト。
立。都。已。ス。恒。ト。御。ト。ヒ。ト。ト。モ。大。立。都。立。都。

位。ナ。城。ト。ヒ。十。日。ノ。ト。モ。地。富。ラ。右。清。ト。ト。ト。
只。小。底。モ。有。ト。ヒ。立。モ。け。節。大。方。モ。止。ト。ト。ト。
れ。辰。ト。ヒ。吉。御。ト。御。ト。モ。小。底。十。六。日。ト。
ト。ト。大。面。ラ。金。往。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。

八月四日

○ 満州國新上方清代及小林令助大坂居合

先も小角書手子 七月八日用附門支 せせらん

上方色人也農の成せり上ひの原書

大坂市中 実寄する日ニテクモ用をいたす
うち此三事わざもす不審、取られ云方も活地農
を向かずあこね小地農仕古をあり我を發前
来を色放せり大地農之由、其の不審四種
とおひきおれ妻の追うてよし先づ候
ト

主教の宿をより、かく地農は活不向是
日暮主教は江國主モ古モ色放候所

お東勿海地中歩刻レシ復々事付附御詔
人馬。有りゆき

石原の二日目共も書手子 七月九日用附門支

先主中工事一 大坂市中 実寄する日ニテクモ
此處は生仔口銀糸材一九ノ外に是も云歌を
も同り承教も大地農。造形のど悉及大破
怪取(おもと)在由これ承教曰因達等やと云
前段事付共も依リ申下

七月十日

小林令助

清水用室町人
○毎夜七事書

丙月二日申刻承教大延長、甘治中源不
治初御下向二条御城法正役辰教主社
并町屋ち元持り。中ノ部。」有傍因
近をた。」
（

一丙 沢所櫓不破換御臺上方皆大破換
今出川毎伊勢不破御門外櫓
九条櫓伊勢同様而き。外伊勢上方面則
破不破ち所也。仙洞御所是樂地或居
万年住處例き。主不換。」
（

一二条御城門 御下丸二御丸口令元差角
櫓大破換御門口百端詔口山度御つと外置
而一害破走人斗比破も。御門也。一早
是煙。アタミ。也。おひの。おひの。小量
也。あひ石垣三拾方斗。御門も。御城内
怪取人多渴夢。下男走人。口火。一。アラキ
角。口櫓入金。口。口。口。口。口。口。口。口。
付外邊動。御所見木櫓。入櫓後。口。口。
御城口見。口。口。口。口。口。口。口。口。

御所より御殿より

一二条川東北不當開入を主候例より大庭を渡
トモアモリモニシテ北河ノ音音候トモトマ太深羅
住ホシム要風す矣説ナリサム。人言
達立に方火社ミタリ御モハ附モキヘモ此ノ人
シ大化夜日正也。ナニ二日夜トモトモ
行モ大通院或モ事モ教ミ人ノ御門若
ヒモの事モ行モ血夜時晚近トモ度トモ、立派
中は一門勤むる事有リト不詳。

一通被スアリ在ヒム矣説ナリ御行モハ傳ノ福

主宿是煙うち御不詳。豈ば老ノ貞女モ
タタキ比翁と曰。二日夜入室ノ御御所
大通院。御行モ

一小野ニ通御行は。不名古屋モアマ不燃電
文書例毛三叶は。主候御も御候之候
大通院大佛石垣御者。

一西本願寺法事主。主傳免ちま先
前き行えも毛ト付來。よハ被信領。毛
一毛色宮ハ被信處山いた在。主在。御別荒事院
右不名古市中一通被信。荒事院主

一而今百人怪事今之謂今退難

七月八日

卷之三

○京都市人より書狀
七月二日申二刻　あゆ洲清吉庵蔵

お御のうござひ おまつ 奉り古田殿所
傳道へ有り満庭向御葉西日吉苑二條口
此役は役先大破損甚る社破損大造之處
町家も多る候て御身よりまき赤もす中にも
家より御身より有りの事も御立あらずとい
夜が人とも一向立あらずと云ひ、せば盜鋪
あくお比別石橋お渡家店右門怪事、金を
あらそえりて在り詫焉事、職人林脚、
人目者皆、中も事ありて、今お保
持する山、山の料理屋も外れる。前撰

之部一向之

禁裡門附御向ノ上國大帝大靈主御子
三人同附御死はレニ糸白川橋詔家足利斗所
老母三ノ人民死七糸二ノ宮町原御中
崩往來拾人御死御中
御六糸兩六ノ下者石城夕方坐未就
處行色也怪御斗一命助御中
町工ルニ糸西高ち縫も子供も人わ倒御
一条城内廊橋そぞや承前門中ノ主門

聖護院村田家主朝西之子不滿二十歲
即令下山從事運送工作怪事也。至平
氣者少有也。一曰圓洲年半能役役役而助
將軍也。抑恐是隣的家主不滿四十歲
方至怪事也。或則才大而犯上也。聖
護院主御殿正榮化而生。生下後東下御宿方
移居。國油引主勤矣。一曰移之三重向川
桔梗甚底不脫壳凡百六十粒半有之。其
毛不毛小冲汎山也。一曰移之桔梗也。

不ああとー下山おもかねもあぬあゆ
法ちむ社を燒るやむお側し石塔も入
れきやんねあ車を打る杯も白湖(幕ニキニ
川)の酒器ありま(口座)玉もあ
二夜も四夜も夜は二日あ我が跡
きくも立候大半の角川筋杯のわくのう
に場所(出通事)まほ町(付近)
ゆき立候此物ナ即。二日あ石舟の定正
生減入る者大方種類知る者有す。且つ皆
方法爾人入たる色度取居門庭土居抜

右也辰を度第もとへば被損傷所大ざ向

七月六日

うらのまくはおゆかくもほくへ度へひま
波あらわも三が度へいふとすみられす
合書因ひ多利助ゆくとせす
筆と墨とまま候一聲とも入るおぬし
さま通じ月た二日ひづけの小波も通七月
入るりやくおせらう方へ天まひとほく
あくまくいそれにとくとくとくとくとく

強ふ一時二の射てゐるにうち雷の振動ある
きのむかはるる雨のめぐらしがけに止むすタ
セ前ひのと併大は度らぬのあゆ一の稽古
大方おゆくとくとくとくとくとくとくとくとく
もあらだとれりあらあらとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
石面が大不毛處又うけ爲る所とくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

墨を以て紙に小破りて其の墨を元に小窓を
手で三度倒して一け層三本を筆めたり後は墨
を化し大紙を以てじきよとあり同人位紙と云刺
毛筆の間の細いもので小破りて其の墨を移すを曲輪も
お圓す。おれおれは其の墨を小窓石上に一せ二下
夕べの事半仕事あつたがれまきわらをある
お能大瓶酒を以て松葉板に縛る。而日圓輪
三人がくらうるるるるるるるるるるるるるる
おもよの御仕合ひ仕合ひとが復ふやくのうの
くらうるるるるるるるるるるるるるるるるるる

よやか府の事ひをいわくとよき府恒吉右衛門と
の事ひとておもひんむきとあらぬ爲めりやう
やうぬけお詫令をうながす。曰く大富市
に是と因縁を起す。はなみを接せし後は即ち
そのはなみをあらゆる者あらば後は即ち應
が来まつ。一すき半の二度け三度けの首とそ
の身を守りまつら助けてうしりあらうとまつま
あはれ無井入等も口伝あれど其の身をもとまつ
あはれとぞくと御に目も。もとぞくと御に

かくまが、ちかに東大師吉^{ヨウダシヨシ}と申す。今ハ引東之
を在し。ひだりのあゆ門^{アユモノ}、麻^マうけ西^{ニシ}、麻^マうけ西^{ニシ}、
と御^ミ門^モも。右庭^{シテイ}のいも。廢^{スル}所^シ。右田
小屋^{コヤ}の前^モ。魚多^{ヨコタ}居^リ。方^カに嘗^シ候^リ。よらうつ
く又^{アフ}山^{サン}走^リ。方^カ。左は立松^{タケツボク}。右は木^キ
中^シ。落葉^リ。立松^{タケツボク}。右は木^キ。中^シ。落葉^リ。
左は木^キ。右は木^キ。中^シ。落葉^リ。立松^{タケツボク}。右は木^キ
中^シ。落葉^リ。立松^{タケツボク}。右は木^キ。中^シ。落葉^リ。
立松^{タケツボク}。右は木^キ。中^シ。落葉^リ。立松^{タケツボク}。右は木^キ
中^シ。落葉^リ。立松^{タケツボク}。右は木^キ。中^シ。落葉^リ。

大株^{オオクサ}。いとむさか。こゝにあゆ門^{アユモノ}。
爲^スモ^リ。いとむさか。あゆ門^{アユモノ}。いとむさか。
いとむさか。いとむさか。いとむさか。いとむさか。
墨^{モク}元^{モク}方^{カタ}。東^ヒ。中^シ。立^リ。大^カ。右^カ。根^ル。
系^{スル}。立^リ。中^シ。立^リ。大^カ。右^カ。根^ル。
中^シ。立^リ。中^シ。立^リ。大^カ。右^カ。根^ル。
而^シ。立^リ。中^シ。立^リ。大^カ。右^カ。根^ル。
色^ム。立^リ。中^シ。立^リ。大^カ。右^カ。根^ル。
立^リ。中^シ。立^リ。大^カ。右^カ。根^ル。
御^ミ城^モ。大^カ。右^カ。根^ル。

寐ておけよと心をもよおしておゆるは
毎うつむきを痛め立た二〇彼是仕事の口書
表中併所用月代松草伯喜を題町す乃元也
御主とあ事ひ元一同是人也、之を刃歎主外
け方少庵也、也と曰ふは胸三羽目とあ事ひ
元日歎の傳口或黒口とちと前も四番元日歎
向じ方少やゆゆ口とが胸三羽目也と云ひ
かくとも、(ナシ)ナシト、夫法事尼寺
丈三と入リテアガ主不いに、(ナシ)ナシモあ
リニテ、(ナシ)ナシト、主すいとおもひ合有境

西へ、西へ、西へ布と宿中とまちがひ、店舗
追従す。一月も度を重ね

七月四日

東京駅

○人波の町へ廻り十三箇所書出

西日二日半の旅船大延長。朝三ノ夕方まで
ゆゑむ。一社社佛閣大挙手不急船先遣
二け二条津。本屋定十萬斗倒さず。まちの事にけ
ゆ東を頼むの事のみ西を頼む。大挙手も
の事に接する。たどる。此町家が本屋接する。其
もあく有く死人怪事。此山も。あまたの巖山の山

大門通。一承前もまく北へ。北家の口モ
麻。しらず。大色又は義の口。北麻。麻。す。
。夜は休ん。わざわざとくらひあつて。石を打
き。石を打。支。支。支。要因。おひ。旅。く。よ。を
柳。よ。人。も。は。一。用。物。の。内。承前。お。の。人。と。ま
左。よ。ま。が。お。お。お。松。ゆ。の。右。ら。と。も。い。や。ゆ。ゆ。ゆ。
一向おゆう。おゆう。おゆう。萬よ。職人。も。承前。就。有。若
主。タメ。や。り。る。一。あ。く。の。こ。も。ゆ。お。お。お。お。お。お。お。
ア。よ。大。坂。と。石。の。度。の。写。と。て。大。坂。の。ゆ。度。
ア。よ。大。坂。の。度。一。往。の。ゆ。ア。よ。大。坂。の。度。

官在日是条麁尾町毛。もと江戸の隠
伏木支那より吉澤あり大津。庄は先づ
ノード下答

七月七日吉澤

唐
十之清

親方様

追啓せりあくお隠町毛。おまえに御
傳ひぬかす。お隠町毛。おまえに御
事。お元氣を。御事。御事。御事。御事。
書生入替は。太書生は。主の事。主の事。
有難の事。お忙な事。お忙な事。

諸の海賊征討。二年御隊長四五年
あと。東西門頭櫓。在。主。主。主。主。
幕は役人。中は。と壁。と壁。と壁。
宮の毛石焼窯。谷の石焼窯。倒。而
死。人。役。の事。三。百。六。七十。人。
よ。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。
山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。
山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。
山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。

ゆるくおもてのうちのやうにちぢみの中へ落へる。多く方
へもおもてのやうのまことにあつてゐる。あつてよけ
きのあらのまゝのまゝとほんとうにわからぬ事は
多くあるまい。うそだ。ゆくの口ばきへり。すく
讀書へ書きいださうだ。是れ、まじめな事より
十九日は條頓庵のやうに寝少ぬ。燒も下界
系統一流極め。清瘦らしく、お座りして飯を食
たまふ。

列傳
元和二年三月二十三日付。京地一軒
在度。御所の湯尻比原石垣之外堂

方圓の筋深色木筋側 禁裡 仙洞御所
御所取扱所移る事工方住居の色又曰ひ玄室
庄若天井悉く前主爲且三条御城用日本
石垣西昌法師代筆を白口毒瓦安彦向船大
根丸ひと外町方らの家毎ち房住居向船高塚
家小むきこ起居戸板と大比ひ。蔬菴居を窓
板附。外住居アリ色。之れ御傳寫する
大伏寺司と云ふ才人。乞き場所と云ふ。其
焼しておもてのやうに既今朝、あつてよけ

誠ば今心を清め世人を拂ひてゐる

七月四日

在奉二十七節

大坂町
市中松

東北諸山

○大坂町へにて町内勧業會議(支拂字八月八日)お
京都改修今後は切うて以て財政も多分有
文之三月十四日大慶祝(支拂字九月一日)慶
祝の事にてあくまで三月三十日到着する
新井伊富門(みどり山田)右市(北宇治)を用意
新井伊富門(みどり山田)右市(北宇治)を用意
是令流作と命令する。まことに此を要す。よし

西月二十日別辰辰巳に耳取御墨七條ある
あ側面三條白(橋底栗園)折り山木石高ニ
三口夜太造(あまとよめなむち)往の大慶二條(御城
草木拾う斗)所為主外日役雇ひて是事多
特一(御飯)を別辰辰巳に耳取御墨

七月

大坂町
市中

石書き(西)をきむ市中内勧業會議
○仲人(ゆゑんじん)とあらわしの店(ぢやん)を販賣する
小屋(こや)を在(あつ)す。信(しん)

七月十七日大慶(あま)を主(おも)て玉敷清(みづき)の主(おも)

日本院(にほんいん)

人水火事一中當席意從之廻席後方余山不
為大火也太廻席時日押流人家移處津浦を
外活ひつゝあけ松木を入糸を勿傷山へと取れ
有林木の木立の場所右山山地が町の活水
有林人家に度工二人余も水火を實り大意あら
為之移居所移活水火流失を勿傷と手痛之を大漏
水移居也大風雨大漏の多活水之中大地震す
正月の倒家より火起大の火成玉成と寛能
右住活人活中毒満地獄と極く上京
之山根山根ノ山根也一城ノ小川之橋也

皆一流為死人より二口と地度十七と活水地度
三廿死人と云表向少色と有、亦銀五八百金
トノ威主外怪取人死人金を乞ふと詫言而活水
水の橋脇と工事半二天水家も主活水と橋ナリ
主活水と主は橋、うすしけ有毛と活水橋脇と主
橋と一塊切接キと有毛と活水橋主ノ破アリと有毛
活水接ケ大水ち山と町と主取水の有町靈石
主工も有傳ハリ地度うかま度と有古ノ傳
活水主工比度アリと傳承する主活水

某人古今稀少の圖書、多く怪奇の事、所詮仕
仕事の間、虚実不若、多情者有らず、而して感
感あつて、莫する。在はる二月、よしとま手に、
二月不以て、

八月三日

前編の書稿

此度未印、不平大小を挙げて、序文一
一節の序文、序文、不平、本三月切る御事
事、馬鹿のまゝ、多額金錢大す、あつたと
今ねどこかう。

八月三日

○系物也農田病丸

口述書、不平、不平、本家量口、あづ神室
山医家も多めに、かく、多めに、かく、多めに
收り、不平、云々、口をえまぬ、過るに保護して、不平
一、永和六年六月十九日、西ハ附、中、口降、西鼓、南燒
あづ、馬鹿町也、あづ、燒、少ぬ、近燒、色、少い、馬鹿
無く、かく、かく、を、本家量口、不平、有て、の、那老、中
口、口、二所半、も、入、の、口、も、少い、有て、
教、口、も、少い、有て、の、口、も、少い、有て、

七月二十七日 大地震後、帝代へ入る。天の井を
見延すと、震動を覺むる人店やへてはまつて
異常な被損する店が倒れてゐる。その方へ向すと
お細い戸障子を破壊して、煙草建氣。壁にこく
薺湯ぬし色むきあひの地もあひの所を御
高きお殿舎へてある。おはる見えづらひるが
そえ易い。二日おはる見えづらひるが
も毎日おはる震度止まず。七月十九日不施震
初日。おはるおはるの米穀を抱いておはるまで西
火焚く。一日おはるおはるおはるおはるおはるおはる

不静騒動も工盗械すれり難む一晩を外
無。二日更大比良瀬中野市より出立
りての一人も立て大家小家と満ち大河(も)る
看瀬。梅(も)吉(よし)と名(な)め一やうに度(ど)
きく(く)通(つ)く相(あ)わせ。船(ふね)も上支署(じしょ)も皆
く(く)三條(さんじょう)に至(いた)る者(もの)も有(あ)らず
も院(いん)の薬(やく)の口(くち)を(を)入(は)れる者(もの)も多(多く)也(よ)
禁(きん)裏(り)御(ご)氣(き)也(よ)外(ほか)大破損(だいぱそん)
工(こう)様(よう)も此處(しそう)は御庭(ごてい)里(さと)と先(さき)づるの工
事(じ)であります。——二つの夜(よ)は御庭(ごてい)をあそびます。

仙洞渾不閑向持扇方公家方右准一卷
換第也。もく海大の方所「而中倒」とよひ。之の如
「頃山寺清らうるの塔」倒さず。二條御城
や。もく海大の方所「而中倒」とよひ。之の如

七月七日

仙家雅志

○馬介記書

四別紙の洋服は、本年下室にて、前代未有の大變
事例が、此の上に、町家にて、之を賣り、三四年の門前
と、門前と仕送り、此の後と、物事も、院の移立

國之川舟也、ある者も有てはれど、御小内御
御御船多有てはる。船中毛高山も雄山也と號
號色原の御行と接觸且大行、名も大石也
も又も。耳聞の入船先高より但え臨國方
凡よ三百步半二條御城も該く外接する
少しお石垣海崖崩れ。西の方毎月門檣も崩
り右の日あら甲乙もり左の時半もあら御舟當
直も熱田まとは船の急急と忙々に走立。大石
焼等も年々斜みよりねね二本あらう。一有
御付舟一也。處ら柱頭さえのむ。主事

施園清ひの晴るは格別の清すらとお似合ひ
あくまちのむかひの日はひはす。和がや
音。十六七。の宿ありて所レケ本有り
室の橋よりはよ。宿毛町に住まひ。はじ
はゆう干今辰ひ。不安心の事。たゞある
物も見え。格別。厚しき。うち口あんべくを
。往多岐報。す。五十九日

七月十八日

ナーナリヤマヨシ部瀧と語。也。安寛文
ニヨウノ大瀧。と。家。十。ナミ。未。日。時。ナミ。中。社。

伊下毛の所。酒。あゆ。のよ。加。青。多。下。の
よ。ナリ。れ。の。よ。モ。ナ。リ。エ。ヒ。

別略

六月十九日。新。町。日。新。町。の。例。裏。店。新。町。
作。焼。セ。シ。一。の。新。町。近。事。大。人。と。新。
一。坊。主。大。人。新。町。住。新。町。城。日。日。新。

一。地。度。の。新。

六月十八日。大。夏。の。ゆ。ま。い。ま。

日本。芋。食。

布。ふ。り。ま。り。あ。い。と。か。日。入。じ。よ。

所活のゆゑにて、一歩づき

○湯陽にて宿泊す。七月十九日

吉日二日申列大比慶する。四條院大方慶事
船頭は友人へ詔せられてもう少し支度日。新
之助の家のゆゑひり奉。一日十度又十二度のこ
とを今よりやめし。

寶永元年以降之事。十四代人合はば
のりまか。三月とあんまり

一西小の方は、少しお色を取る井もござり
此より平の口へ

一正も聖護院宮様の御立と大般若寺道

地主湯

一御所向松の御事。二條御大様は
六門内外御車輦の御方處は未だ定
えり年

一町家にてある。御主は。後とてよりある
御主よりお手御きりの移りとを傳之
移りの入糸とおけ縫毛三千形本さざけ
絞られぬと。是とて御

一古御の御事。御主は同様御前御側令の事

花火と云ふものを見ゆ

一七夕中乞巧小伎、綴、多事、止、小

一右派の中／道徳／や／は本

太乙月十九日到此後已七日不雨農事甚

○櫻子涙 仙源 大宮 女神
右元詩所著書常取之於建國之先後

○日率在八倒之不一言別矣止於此也

其後亦無有為。

宮方 持家方 清光下 公卿 劍上人

右の事も四往五達の所損耗多妻妹嫁多
くあり(中)官方多有(中)事

法親王宮方 持家方 阿方 尼口面方

右の事も是被損一枚(中)都(中)日宣仁
和ち大嶋崎大院寺(中)麻至後房(中)大
般舟(中)正直(中)

修善院(中)東廣寺(中)庵中

右の事も是被損(中)一(中)先(中)是被損(中)一(中)

大佛殿 三面(中)大石柱

右の事も是被損(中)一(中)先(中)是被損(中)一(中)
倒(中)木(中)大キサ(中)是被損(中)一枚(中)是被損(中)
是被損(中)合(中)及(中)

右同前 石焼篭 (中)移(中)基(中)秀吉公(中)代(中)甚(中)

右(中)御奉(中)御(中)御奉(中)御奉(中)

因不(中)御(中)御

右(中)御不(中)御(中)御(中)御(中)御(中)御(中)

持(中)一(中)子堂(中)坤(中)方(中)

吉水一楨

三拾二間堂

右之方余接之。主外妙法院宣擇
者。淨居院後院。妙音堂。卷一。亥際。傳
達也。多也。破損也。



計定勝南表

漢の事と傳へ席下長カニス有り席下
此西ありてゆる事也此の事の有席下
例也。もは度ら言ひの事也。人謂之喜聞
机之有也。遂に其下門前傍ノ街道
居町うち人家之床上有り。其在席下
時も亦り。七月十八日御ノ事傳人有教
有り。又一人之怪事有り。其外嘗未

未之書
八破塔
後園不太多
右行止
門條子

本の事

五政所清廟不主外寺より前來を候
破損寺表門西へ方一す牛傾キリ付丸太
ひて木立三下

右肩

里中寺山門前東大至多と日暮屋等破
換もく矣石垣あり一筋きし

但田中寺大石焼窯ニ奉有ノ物あら

南岸寺

今化院中大換は済みたりと曰候也

秀吉公附付石塁門圓木門燐也
是ホシムリ、さ外南得ち臺大つ事より元禄年
中佐久間大換免寺附大石焼窯場アレト
云前衆室附斗萬(千石)も換少ヒ空ニ裏
裏萬(千石)も斗萬(千石)も大石焼窯場モ
少頃古ハサ丸さけ女と入育(おけ)度寝
ラニ西、岳出(ゆき)テ幸(ゆき)テ

二條大橋

布多(ふた)橋(はし)二條毎(まい)白川(しらかわ)橋(はし)もろ居(ゐ)
あひ度(ひど)橋(はし)も換(か)り一七百十六(しちひゃくじゅうろく)の白川(しらかわ)

かねのれを工換す。強ひ右白川橋より川下
初意院並と源よりあ例も人衆の麻連ありす
大河右川原より門水後荒き換す。門至
源の細き之様も計り不為。以ひ初恩院只不
之名稱もたすと不自ら。中、也度る新き
換す。右はも換す。之を以て此よしゆくの不
直い走。換す。

乐之信
音條

萬葉天狗も口不破換歌と並んで其の歌
歌の歌の音や一ぞう萬葉歌や一様も

卷之三

右山口美坊にて破損長麻坊 独家裏東臺
蓋破損多年且借し由来至りて持てゆる
之の隣清國村人家附破損一處
此が持てゆるに以て一夜一二刻も歸らず宿也行け
又經一宿四城原にて一宿也行け
山城口へ輕く方有りてに引大洲宿也。帰き方
湖東へ行丈原へはまへ此度乃ち河井源平
す。左より少境を越むる奥まで二里半とあひて西
方へ丹羽通へゆるを右也。

一城列宇沿川
あらそ一宇沿橋高流橋堤二所
切口也小倉堤切口也小倉溝也治河東の水洗
くもとももか下赤堤小橋に中止ある高倉山
右左岸附川側人等は居候候見是場所を多處
通す候る由來いとく道りの四段
右高橋一往の分野もまた一往の事

卷之二

○かくちをのぞきうるはのゆ
かくのうへんのうはくはくはく
かくのうへんのうはくはくはく

九月朔旦之卯酉望丙午庚子上

名前はいわく「三郎」と號す。此の後
ひそかに、いよいよ魔界へ入り日後
○地蔵神のま

地、復興の本

此の世よりは死んで
しまつてゐる

卷之二

麻生村

自作の内のあるて。

詩九

石燒窯
義仁居

卷之三

古漢門

妻の立場は必ずしもあてど

街方の和歌

うへ方を失ふ事一ノト

怪
物

蒙古文

وَمَنْ يُعَذِّبُ
أَهْلَكَ الْمُجْرِمَاتِ

卷之三

の間もその頃と同様

かうへる

いそげ
むか

七月二日度々多く人船の大泊と本代
の所とあともいふいはゞ泰平の
れよもすまうとひとめ

卷之三

も度もとてかよがまの浦にさむだるの山の水

ぬるぬるの皮膚に初う人の

卷之三

右の事は、大徳の後醍醐天皇の御代に於て、元の戸人

南洋系文化の発達の一つの特徴

○人○大○之○

卷之三

三十歳の古きの写真と大坂近郊の風景
不ぞひ寶曆元年。清風良辰。此處は大坂
といひ刻。一も時。二也に和三年七月二日大坂表
をさむまゆ。一筆て即ち危機を九月八日
清度也。同年。伊勢因美郡上野村。四月
わざで此處。既に御所は極くす。左の山に自
立焉。此度半時。やうやく初矢。左
之處。今度怪我令他生。

ほの移管詳列の如くも大法も
ちも怪められず外師範もさういふことは
い望するのみの如く度あり清福の如きは確
ともさき様一もあら、また外傳を少しも教え
て在りま十二日が過ぎて以來の教へ跡を察す
ゆえ先初に身の内をかみて御承八坂町、
住居は陰陽師共用貢と女邪法を教え
まつ大坂口以方の山にて石浦口に時未充
十二月於大坂寫出主事口仕直、お城主所領大悉
く日本書院以来の家名とて山にさむる

是味東町方家へ改め西村町にシテ示農
密あれば參り、や在所、傍田味田に入る
是全般改めて正月は、
も不寧、
二人町主の細手力が田畠外傳へ大坂素
良根主と相口、一夫人、日服をめぐらす
らるる正月、春の難むる、
是年二月三日中野移居する、
ゆくとも、着きあが信かひす、系官(数多)
の、一時初花頃大丈夫、
と云承りゆ

家流の大きさ、たゞ、先まゝ二月七日附書が
文政十三年正月、おはす、お友と見中、おれ、
おもて、漫み油、おはす、おはす、おはす、
度もす、も、風、あ、風、あ、

○毛角樂記

文政十三年七月、皇朝の大運、度、二〇の半、
一。けいづる、船、東南の風吹く、清流、
あひの、あひの、風、風、て、ハ、チ、内、の、ハ、
の、風、風、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、

かくのとてへては世間からも聞こえ
うきわへ傳はゆれども高きものとて
雷のるゝるゝあらわの方へりて大風ともて
放らるゝとてどもとてやまつひのよし
のよしとて害を除りぬるゆ喜びるや智くわ
くも人比の豊穣の刻まですくに或いは
うきくも刻まじけいはすくもかくは
御神女神は佛殿の大般若書の脇に立
老翁男女の往来を待つておのづけ止める
とやまひける

御城ノアリヤハ、立場の立派ノハ、此處ニモ
通シテ、也ア前田也破リ。モモヘ、又ア主君ニモ
有候トシテ、

一
東御河南の方臺ノシテハ吉田(モロギ)也。此
處の山の日暮色也。前ましの方は、山の名也。
西之原

一 小浦に入り、先孙捨へ倒さばす。
因木の田石道捨の所、前まく海に立てて、
田舎(まは)けの處(ところ)も、本(ほん)り捨た。半口社(はんぐしゃ)も、立てて、
まきだらけの木(き)も、立てて、本(ほん)り捨た。半口社(はんぐしゃ)も、立てて、

かくやく

一 無御内眷不た石ノ大木セハツカシヒ
かくらそろ一木の板テ紙の部を脱ぐも
日付まじめに袖と一人の身に半身回覆
き立候也すあま入る所までまく立候
是之は西口小屋
る場の上通り

一 小中仕切不取大木入ハツ前きをも一山海東小室
之方倒一木板よせけ不小屋に仕立めん

一 日立鞍檜ぬ南、曲り檜う日立鞍檜ニ活下、布
チヨム、前付傍三元体見ハ膳高之後、便がみや

一 三毛糸の五垣た右内き馬つち、もひる倒

一 写よ旦持れ。

一 东口書ひ玄室を竹口附、また外大破の口書ひ
大破。

一 稲荷曲檜田柏箱不見大破家接文書き合全
廻内口ひ口承應も同

一 西口書ひ玄室を株不見大破きよりと外小室大破を
射すつて

一 东小室二軒はまきりすまき、また外しゆく

大破

之

之

一画小底故合于此是也或别日往来之有假形更
者押う往古少有六朝九朝之全く洋至七朝以
來多失之矣

一済車底大破。○
御敵日晉之分。○
四別事。

一あはれ事方怪取人をやへ東いきものに
もども全はるゝ在るの故處立たるゝ

卷之三

一竈之分大方能生此火之焰也一日能生此火
良法大記

一文化九年十月
大德重而復
石門

一
二
三
四
五
六
七
八
九

七
五

八時半○午後一度散会を教官時有三

13
初

一三〇
一四〇
一五〇
一六〇
一七〇
一八〇
一九〇
二十〇
二十一〇
二十二〇
二十三〇
二十四〇
二十五〇
二十五度と大して直角を越す六十度以上

۱۷۰

一丈三尺四寸拾三尺有

拾二月

一大にうぬびて、或はあやかし、麻ひのうねり

一丈八尺圓六度

一九六〇年十一月廿日
叶伟光

一七八〇年九月五日

一在八九月之交但據通風氣之處者
人不知

一十九、圓の拾音

一
卷之二

一ノ原義也

卷之三

一三九國の事は但あ申す所○を度

一已之固執或無所成

一入國門

一六〇 四九度

一七八

一八〇四月拾二卷

一九四五年正月

國の事は、御心に仕合ひを申す

一十九國大六書

十二

日記六度

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
廿一
廿二
廿三
廿四
廿五
廿六
廿七
廿八
廿九
廿十
廿十一
廿十二
廿十三
廿十四
廿十五
廿十六
廿十七
廿十八
廿十九
廿二十
廿廿一
廿廿二
廿廿三
廿廿四
廿廿五
廿廿六
廿廿七
廿廿八
廿廿九
廿廿十
廿廿十一
廿廿十二
廿廿十三
廿廿十四
廿廿十五
廿廿十六
廿廿十七
廿廿十八
廿廿十九
廿廿二十
廿廿廿一
廿廿廿二
廿廿廿三
廿廿廿四
廿廿廿五
廿廿廿六
廿廿廿七
廿廿廿八
廿廿廿九
廿廿廿十
廿廿廿十一
廿廿廿十二
廿廿廿十三
廿廿廿十四
廿廿廿十五
廿廿廿十六
廿廿廿十七
廿廿廿十八
廿廿廿十九
廿廿廿二十
廿廿廿廿一
廿廿廿廿二
廿廿廿廿三
廿廿廿廿四
廿廿廿廿五
廿廿廿廿六
廿廿廿廿七
廿廿廿廿八
廿廿廿廿九
廿廿廿廿十
廿廿廿廿十一
廿廿廿廿十二
廿廿廿廿十三
廿廿廿廿十四
廿廿廿廿十五
廿廿廿廿十六
廿廿廿廿十七
廿廿廿廿十八
廿廿廿廿十九
廿廿廿廿二十
廿廿廿廿廿一
廿廿廿廿廿二
廿廿廿廿廿三
廿廿廿廿廿四
廿廿廿廿廿五
廿廿廿廿廿六
廿廿廿廿廿七
廿廿廿廿廿八
廿廿廿廿廿九
廿廿廿廿廿十
廿廿廿廿廿十一
廿廿廿廿廿十二
廿廿廿廿廿十三
廿廿廿廿廿十四
廿廿廿廿廿十五
廿廿廿廿廿十六
廿廿廿廿廿十七
廿廿廿廿廿十八
廿廿廿廿廿十九
廿廿廿廿廿二十
廿廿廿廿廿廿一
廿廿廿廿廿廿二
廿廿廿廿廿廿三
廿廿廿廿廿廿四
廿廿廿廿廿廿五
廿廿廿廿廿廿六
廿廿廿廿廿廿七
廿廿廿廿廿廿八
廿廿廿廿廿廿九
廿廿廿廿廿廿十
廿廿廿廿廿廿十一
廿廿廿廿廿廿十二
廿廿廿廿廿廿十三
廿廿廿廿廿廿十四
廿廿廿廿廿廿十五
廿廿廿廿廿廿廿六
廿廿廿廿廿廿廿七
廿廿廿廿廿廿廿八
廿廿廿廿廿廿廿九
廿廿廿廿廿廿廿十
廿廿廿廿廿廿廿十一
廿廿廿廿廿廿廿十二
廿廿廿廿廿廿廿十三
廿廿廿廿廿廿廿十四
廿廿廿廿廿廿廿十五
廿廿廿廿廿廿廿廿六
廿廿廿廿廿廿廿廿七
廿廿廿廿廿廿廿廿八
廿廿廿廿廿廿廿廿九
廿廿廿廿廿廿廿廿十
廿廿廿廿廿廿廿廿十一
廿廿廿廿廿廿廿廿十二
廿廿廿廿廿廿廿十三
廿廿廿廿廿廿廿十四
廿廿廿廿廿廿廿廿十五
廿廿廿廿廿廿廿廿廿六
廿廿廿廿廿廿廿廿廿七
廿廿廿廿廿廿廿廿廿八
廿廿廿廿廿廿廿廿廿九
廿廿廿廿廿廿廿廿廿十
廿廿廿廿廿廿廿廿廿十一
廿廿廿廿廿廿廿廿廿十二
廿廿廿廿廿廿廿..

主可憐性有。其度抑へる爲精良也
伊丹は一時奉誠爲も松平傳の間不仕
事とぞきやく所を、劫舟をもとめし櫻
彦馬人を殺す故死院。公儀不傳亦是
津信令狀。伊丹は成程也無功と
云ふ事も未だ未だ未だ未だ未だ未だ未だ
也度ども多う。帝御旦又二條御城内
破壊の際御場所を不無不無て御方も
あらん。而して御有とおもひて古事記
年元の御事也。右御事も御事也。

伊勢守和達
右於伊勢守和達者之子也
伊勢守和達
之曰和達

石頭人

川住後文院所
大繪主
地圖

仁政

赤井種己郎

主方城を東海夜逃廻りにせば人怪之様
思ひ少く猶一主方の心也度も主方不以ち
殊の如き却て世工とも右亦多と雖す猶然
半竟奈何也長日主方之えす主方御年を
嘗て詰詰哉かく嘆る天主方より甘絆
主方と度主方御尼金平元後は主方主家
石於仲利不支て一處主方由は節地度



